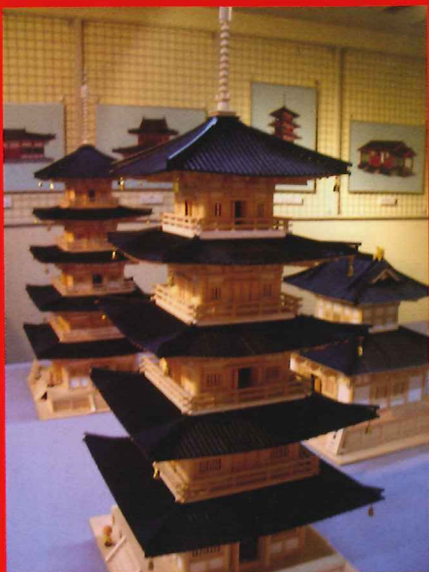


東大寺大仏のふるさと 智識寺



企画 柏原市市民歴史クラブ
＝柏原市まちづくりに頑張る団体補助金事業＝

智識寺と古代の大和川



智識寺と古代の大和川

古代の柏原は交通の要衝として繁栄していました。

難波津から奈良に向かうと現在の柏原が玄関口です。陸路も生駒越えは急峻な為、竜田道が利用されました。

なお、今日の最寄り近鉄大阪線安堂駅、堅下駅またはJR大和路線柏原駅が便利です。

智識大仏

華嚴経（けごんきょう）は736年に日本にもたらされ、あまねく宇宙を照す本尊・盧舎那仏（るしゃなぶつ）を大仏と呼び、多くの信仰を集めました。唐や百済、新羅の渡来系の人たちによって仏教文化や技術などが直に河内にもたらされていました。

聖武天皇も智識寺ではじめて見る荘厳な盧舎那仏（智識大仏）にきっと魅惑されたのでしょう。

智識大仏の詳しい記録はありません。大きさは約18m（六丈）説もありますが、仏の身長といわれた4.85m（丈六＝1丈6尺）が当時大仏を指したと考えられます。

正倉院文書によりますと智識寺に相当な量の銅が蓄えられていたので金銅の大仏と想像できますが、民衆が造るには大きさにも限界があります。

聖武天皇を魅了した大仏は、どのような大きさの仏像だったのでしょうか。

また、智識寺に大きい観音立像が存在した記録があり、倒壊時に微塵に吹っ飛びました、これは塑漆像だったと考えられています。

東大寺で

東大寺大仏殿で案内の人の声が聞こえます。

「この大仏さまは、聖武天皇（しょうむてんのう）が今から1250年以上もの昔にお造りになられたのです」

「天皇がこんな大きい大仏さまを造ろうと思ったたれたのは、河内柏原の智識寺にあった智識大仏を、おまいりされたされた時なのです」

「それじゃあ、東大寺の大仏さまのお手本は、智識寺の智識大仏なの？」

「そんなお寺や大仏があったなんて、今まで知らなかったよ。智識大仏についてもっとくわしく知りたいね」

こどもたちは、ワイワイガヤガヤおしゃべりしながら通りすぎていきます。

続日本紀（しょくにほんぎ）

日本書紀の後を受け奈良時代の697年から791年までの編年体の歴史書で記録性が信頼が高い文献です。

イラストの説明内容は続日本紀の749年に孝謙天皇、聖武太上天皇、光明皇太后が東大寺参拝に発せられたことばです。『740年2月聖武天皇が河内国大県郡の智識寺におられる盧舎那仏を拝み奉って、その時すぐに自分もこのような仏を造立しようと思ったとあります。』



智識寺

知識（智識）は、仏教を信仰し、寺院や仏像を造るため自分たちの財産や労働力を提供した人々のことです。

智識寺はこれら知識によって建てられたお寺と考えられます。

東大寺の大仏の手本となった仏像も知識によって造られたものでしょう。

太平寺地区の古代の寺跡（太平寺廃寺）は礎石や絵図、地名から東西にふたつの塔をもつ薬師寺式の伽藍配置だったと考えられています。

東塔の調査で二重基壇の一辺が20.8mもあり、犬走りも確認され、心柱を支える大きな礎石（心礎）彫りこまれた柱穴から塔の高さが約50mと推定されています。葡萄唐草文の鴟尾（シビ）の一部が出土されていますのでかなり格調の高い寺院だったことは想像できます。

寺院の創建は出土瓦から660年から670年代と推定されています。藤原京の本薬師寺の着工は680年ですから、唐や朝鮮半島の渡来系技術者による初の双塔寺院“智識寺伽藍様式”だったのかも知れません。

金堂 基壇寸法：東西 21.6 m 南北 17.9m 高さ 1.4m
＊ 建物寸法：正面 15.5m 奥行 11.8m 高さ 18.5m



大仏がまつられていた金堂CG

孝謙天皇 智識寺に参拝



孝謙天皇は756年河内六寺を参拝、智識寺には大仏の完成の報告をされました。

740年に父・聖武天皇が初めて智識寺を参拝され、749年に孝謙天皇が行幸されています。盧舎那仏に対する熱意はなみなみならないことが理解できます。

NHKドラマ「大仏開眼」に使用のセット



都市空間に突如出現した高さ9mの盧舎那仏。

古代史ドラマ「大仏開眼」で聖武天皇は河内国智識寺の盧舎那仏を参拝してわたしも国家のためにこのような仏をつくと話される。

創建期の大仏



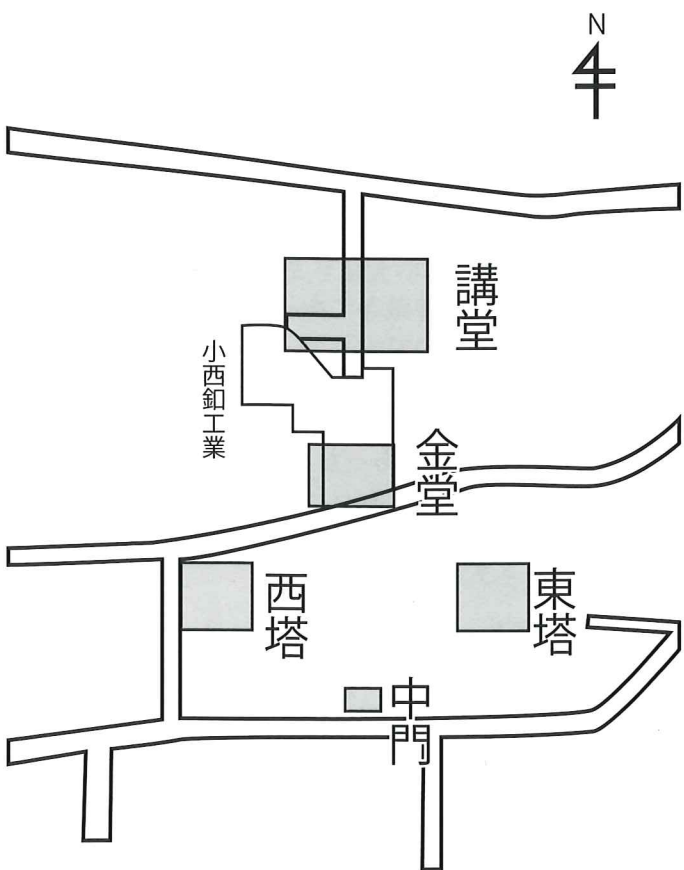
現在の大仏の3次元モデル 創建期大仏の3次元モデル

東京大学生産技術研究所が歴史遺産の管理修復を目的に東大寺大仏の三次元モデルによる復元を行ないました。東大寺は8世紀に創建されましたが、度重なる地震や戦火の被害にあい再建や修造が繰り返されてきました。その結果、創建時と現在とでは時代の影響で少なからず変化していることがわかりました。

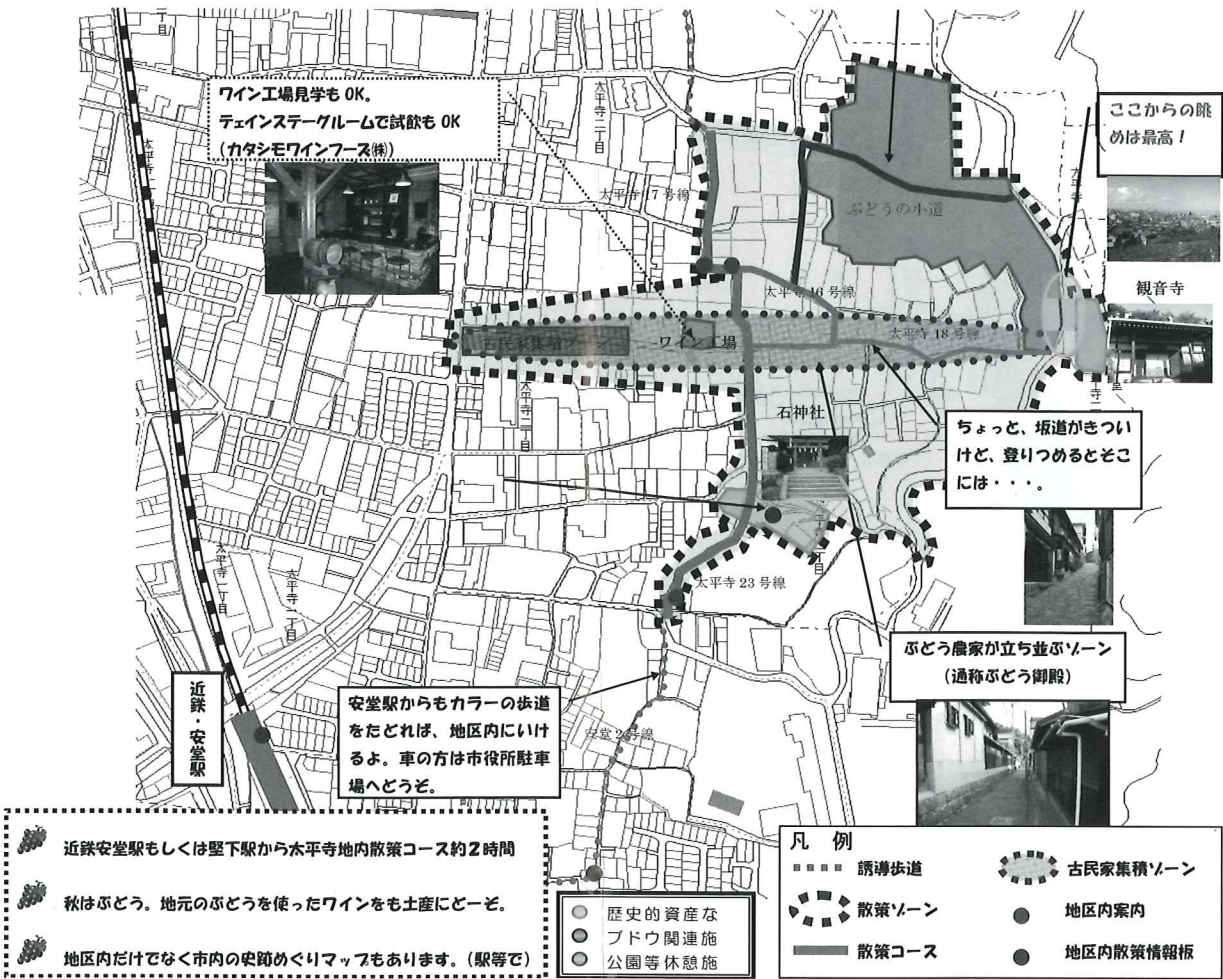
この復元結果から創建期の大仏の顔は写真のように現在より細面であることや鍍金に使われた金の使用量が58.54kgであったことも確認されました。

コンテンツ論文「創建期の奈良大仏と大仏殿のデジタル復元（東京大学生産技術研究所・大石岳史 東京大学大学院情報学環・池内克史ほか）」から引用しました。

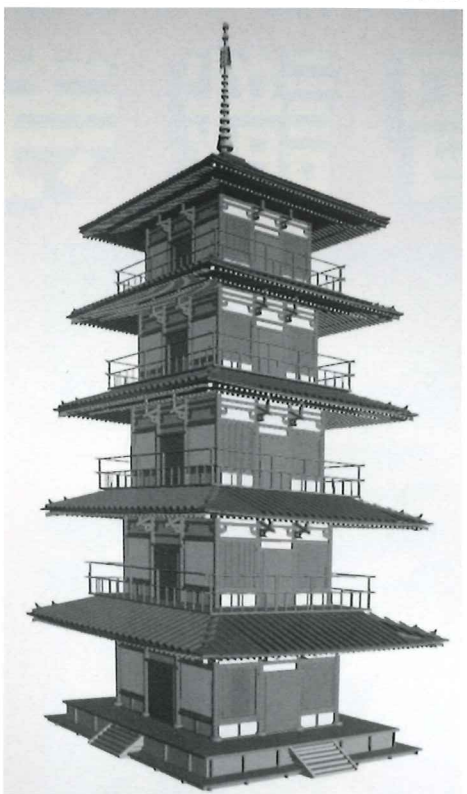
太平寺に伽藍配置(推定)



いざな
太平寺への誘い



東塔
コンピューターグラフィック制作



二重基壇：高さ 1.4m
上部基壇寸法：16.8m×16.8m
下部：20.8m×20.8m
建物寸法：10.8m×10.8m 高さ 48.8m

いわ
石神社にある心柱の礎石

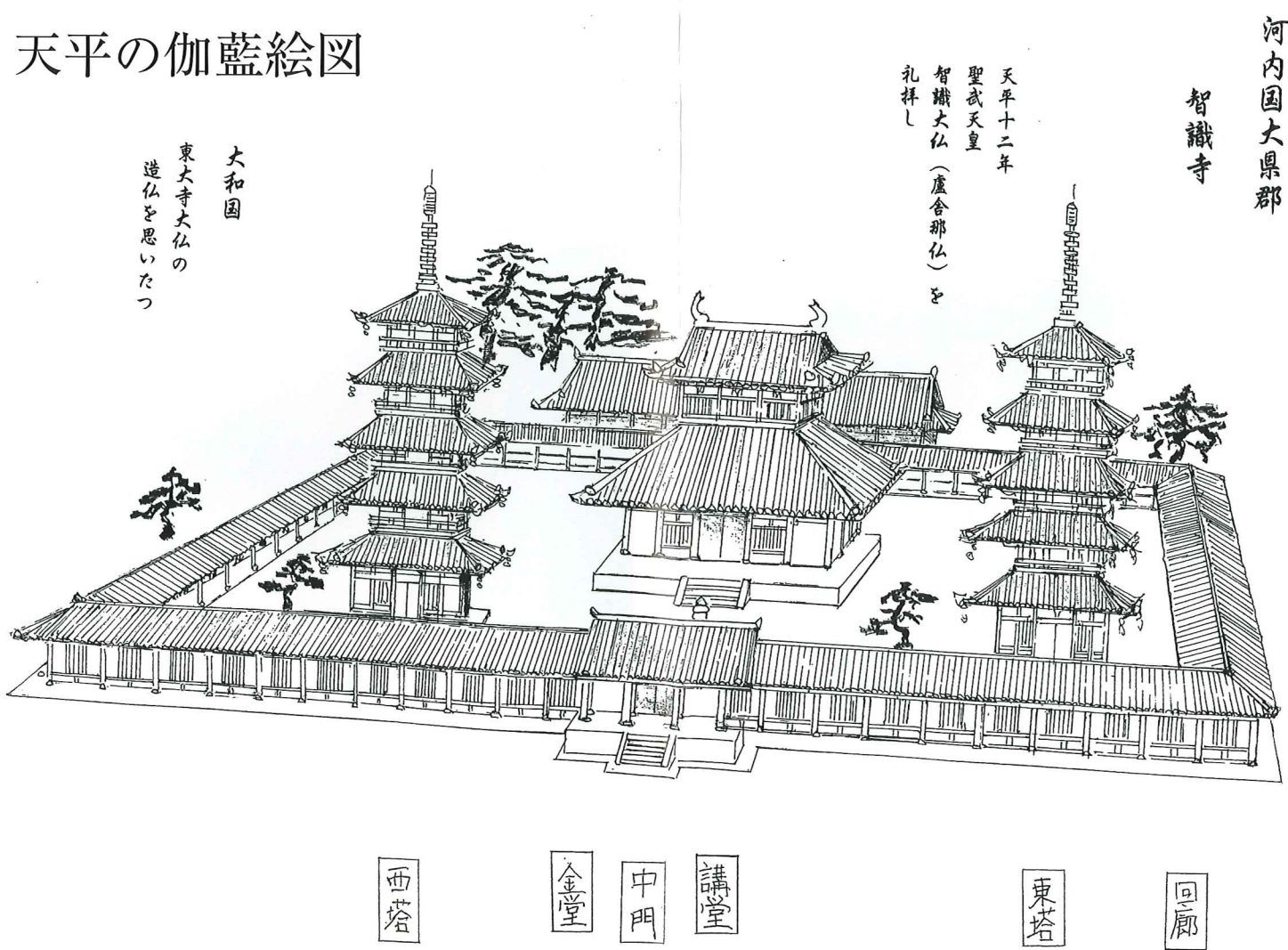


東塔の付近にあった礎石が今は石神社の境内に移されています。五重塔の心柱を支える礎石で心礎とよばれ彫りこまれた柱穴は直径122cmあり、塔の高さは約50mと推測されています。

西塔は江戸時代の絵図に礎石が9個描かれています、心礎は明治のころに売られたらしく今は京都市左京区の庭園の庭石となっているそうです。

古代寺院の礎石にも数奇な軌跡があって地元民はますます智識寺への思いを熱くしています。

天平の伽藍絵図



「大仏のふるさと—智識寺—」

古代の柏原は大和と難波を結ぶ要衝で、陸路は竜田道、水路は大和川の舟運が繁栄した地でした。

大和川の両岸には朱色に彩られた河内六寺や河内国分寺など合わせて15カ寺の伽藍(建物)がひしめき天平文化の華を競っていました。

なかでも智識寺は高さ約50mもある双塔寺院でした。

今から1270年前、聖武天皇は難波宮へ出立の途中、智識寺を参拝され、光り輝く盧舎那仏(るしゃなぶつ=大仏)に深く感動し、大仏の造立を決意されたと「続日本紀=しよくにほんぎ」に記録されています。

（西井正三・新井）氏氏

柏原・智識寺 $\frac{1}{50}$ 模型



智識寺の復元模型を見つめる「柏原市市民歴史クラブ」のメンバー（奈良市の平城宮跡で）

平城宮跡会場で展示

平城遷都1300年祭が開かれている奈良市の平城宮跡会場で8日、東大寺の大仏建立のきっかけとなった、柏原市・智識寺（廃寺）の伽藍模型の展示が始まった。11日まで。

同市の「市民歴史クラブ」（長澤星二会長、約20人）が50分の1の大きさを制作。740年に智識寺の大仏を参拝した聖武天皇が、

743年、大仏造立を発願したと「続日本紀」に記述があり、大仏を通じた河内と奈良のつながりを知ってもらおうと企画した。

模型は会場の交流ホールに置かれ、高さ1.5メートルの東西両塔などが入場者の関心を集めていた。長澤会長は「聖武天皇も見てもうえたようでうれしい」と話した。